

論及し、以てそれ等一般文化事象の關聯的發展の中に、ルネッサンスの歴史的進展を把握せんとしてゐる。そしてその目的は或程度迄達せられてゐる。がもし強ひて遺憾に思はれる點を指摘するならば、本書の原稿が限られた僅かな時間内の講演のそのためであらうか、各文化事象の歴史的關聯、及それ等の事象ミルネッサンス精神との意味的結合が十全には論及されてゐないことこれである。特にルネッサンスの精華とも云ふべき繪畫、彫刻に就いては一層その感を深くする。併しながら、もし讀者にしてそこに挿入された多くの挿繪を凝視熟讀するならば、その繪によつて、無言の而も充分なる説明を觀取し得るであらう。

こまれば本書は「榮えゆく人生が、精神及び藝術の生活に於て、いや高まり、いや廣く廣まり行く傾向を有する限り、それが凡てルネッサンスの發生である」こいふ著者獨特の史觀によつて貫ぬかれてゐる所の、伊太利ルネッサンスの綜觀史であつて、伊太利ルネッサンスの眞髓を直ちに把握せんとする者には教ゆる所大であらう。(菊

判二四二頁、價三、〇〇圓、東京岩波書店發行)(井上)

●西洋近世史講話

齋藤清太郎著

西洋史上、中世と近世とを分つべき點は二三に止まらない。たゞへば中世は一方に封建的割據主義が行はれると共に他方、皇帝或は法皇による世界的統治が企てられたに對し、近世にはこの二傾向とも影をうすめ中央集權的國家の發達を見、同時に是等諸國家の國民的對抗が甚しくなつた。而して學藝復興以來深められた個人の自覺は獨り學藝方面にて見られたのみでなく信仰界に於ても加特力の統一主義よりの解放を主張して宗教改革が生じた。種々抗爭の後、基督教徒を新舊の兩派に分たしめた。更に新大陸の發見により歐洲人の活動範圍が擴大されて大西洋時代の出現し來る事も注目すべき近世的特徴である。本書はかゝる特徴を有する西洋近世史を政治史を中軸として述べられたもので、如上の諸特徴を各方面に看取し得べき、宗教改革より米國獨立に至る迄の約三百年間を含んで居る。格別に新しさを求めず着實に各國內及び國

際間の政治的轉移が詳しく講ぜられてあり、特に著者は常に國際關係に注目を怠つて居ない。今まさに世界的地位に在る我國民の世界的知識の養成に資さうと云ふ著者の意向はこゝに見出される。十六世紀から十八世紀末に至る迄の歐洲政治史の好個の參考ならう。原語を並記した索引も讀者には大變ありがたい。地圖その他の圖録はない。(明治書院發行、三、〇〇)(猪谷)

● 歐洲經濟史

本位田祥男著

日本評論社刊行の現代經濟學全集中の一編である。凡そこの叢書はその性質としてなるべく穩健中正な一般の通説を平易に一定の紙數の中に講説することを目的とするが故に、この書も亦特に著者が自己の新見解新研究の類を掲げてその當否を學界に問はうとしたものではなく恐らくは彼が其の生涯の事業とする世界經濟史の研究に出發點を與へるに共に他面よき入門書の少いこの方面に手頃な指針を供して頼に高まりつゝある一般社會の要望を満たさんことを試みたものであらう。著者はまづ紀元

始めグルマーネンの登場を以て歐洲經濟史の始期とする。と共に其後の歐洲を經濟的に一の統一體と見做し、之を前資本主義並に資本主義の二大期に分ち、更に兩者をそれと三分して共產村落、莊園ギルド、及び商業資本主義工業資本主義、金融資本主義の時代と名づけ其の工業資本主義時代を以て敘述を終つてゐる。數多い碩學達によつて提示された既存の發展段階説に兎もすれば拘泥束縛され勝ちなこの方面に比較的自由に時代を分つと共に、之を以つて世界史の全體を律すべきものとせしめて普通に所謂中世以後の西歐にのみ限つた所に著者の穩健なる學問的性格が認められるであらう。敘述また平明、徒に引用や参照やを本文の間に挿入することなく前後一貫同一の文體を以て通讀に便してゐる。卷末に三十八頁に互つて參考書名を挙げたのは讀者を益すること多いであらう。(菊判三九三頁、東京日本評論社)(柴田)

● 郷土地理研究

小田内通敏著

土地に即して營まれる我々人類の生活の考案には土地